

前田慶次

前田慶次は今年2011年、400回忌を迎えました。慶次に関する史料は非常に少なく、数々の逸話や、盟友・直江兼続に関連するエピソードは、そのほとんどが後の世で誕生した軍記や逸話集によって形成されたものです。ここでは有名な逸話にとどまらず、普段耳にしない慶次の人となりを書き、400年前に確かに生きていた、とびきり魅力をもつ【武人：前田慶次】その姿を再構築したいと思います。

1 生没不詳の慶次

―出生の秘密―

前田家の長子である前田利久は滝川家から妻を迎えており、一女が熱田の加藤隼人氏に嫁いでいます。利久には男子がいなかったため、弟の安勝の娘を養女として、妻の滝川一族から慶次を迎えました。慶次が滝川一族の誰の子かは不明です。

滝川家の一益（かずます）は織田信長に仕えた重臣で、慶次はこの一益の縁戚とされています。

- ・ 滝川一益の息子
- ・ 滝川一益の弟
- ・ 滝川一益の甥
- ・ 滝川益重の息子
- ・ 滝川益重の弟
- ・ 滝川益重の甥
- ・ 滝川益氏の息子

と諸説あります。

―死亡説―

諸説挙げればきりがありません。

米沢では慶長17年（1612）6月4日、堂森で死亡し、遺骸は北寺町一花院（いっかいん）、



堂森善光寺にある供養塔

あるいは堂森善光寺に葬られたと伝えられています。（享年70歳余）

一花院跡地は関興庵が管理していますが、墓は不明です。

加賀藩資料では、『奥州会津にて卒しぬ』とあります。

また大和刈布にて、慶長10年（1605）11月9日73歳で死去。刈布安楽寺に葬られた説もあり、方4尺、高さ5尺の石碑に『龍碎軒不便斎一夢庵主』（野崎智道道記）と銘があると記されています。石碑は確認されていません。

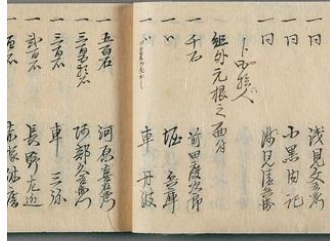
庄内藩の医師田澤氏は、慶次の後裔とする伝説が残っています。明治の女流作家、田澤稲舟氏によれば田澤家累代の位牌に『天徳院殿利大義勇人居士』（永慶寺）とあります。

尚、慶次は前田利久の弟安勝の娘との間に1男5女を儲けたとされています。（3女の説もあり）

2 歴史に刻まれた慶次～利家に帰順、出奔、上杉家へ仕官

戦国武将は城主でもない限り、記述資料は皆無に等しく、敗者の記述は勝者により抹殺されます。その中に残るわずかな慶次の記述を探してみます。

《慶次の足跡》

1533年 (天文2)	慶次誕生(加賀藩資料により逆算)
1541年 (天文10)	慶次誕生(米沢藩資料により逆算)
1583年 (天正11)	織田信長本能寺で討たれる。利家金沢に入る。 この頃、利久慶次親子は利家に帰順し金沢に入る。
1584年 (天正12)	慶次末森城の戦に参加
1588年 (天正16)	慶次連歌会興業(雅号似生(じせい))木戸玄斎歌会に出席
1589年 (天正17)	慶次溝江長澄の連歌会に出席
1590年 (天正18)	秀吉小田原城を攻略。利家、慶次も参戦。検田使利家のお供で奥州碓が関まで行く。この頃慶次は前田家を出奔。
1598年 (慶長3)	慶次、上杉家に仕官。禄は1千石。 

上田土籍(上杉文書)(米沢市上杉博物館蔵・画像の無断転載禁止)

1599年 (慶長4)	前田利家没(61歳)
1600年 (慶長5)	家康会津討伐に動く。石田三成挙兵。 兼続最上攻め慶次参戦。関ヶ原で西軍敗れる。 家康との和議交渉に本庄繁長上洛。(慶次京へ)
1601年 (慶長6)	上杉家米沢30万石に移封。慶次米沢へ(道中日記)
1602年 (慶長7)	亀岡文殊堂で詩歌会(亀岡百首)。兼続、慶次参加
1612年 (慶長17)	6月4日慶次堂森で死去。北寺町一花院に葬られる。 また堂森に葬られると伝わるが確認はされていない。

3 文化人慶次～武士の嗜(たしなみ)

慶次は文化人としても名を馳せていたようです。それを記す一説として「京都の一隅にあって堂上貴顕(とうしょうきけん)の公家や文人とも交わったことで、和漢古今の書と親しみ、源氏物語、伊勢物語の秘伝を受けられたという。連歌は当時の第一人者、里村紹巴(さとむらじょう)に学び、茶道は千利休七哲の一人である伊勢松坂城主古田織部正重然に皆伝を受けたともいわれる」とあります。『米沢人国記』

「連歌会とは」

連想を基礎とした和歌のしりとり遊びで、全体としての内容の流転変化と機知の応酬が興味の中心である。連歌は鎌倉時代、室町時代へと次第に盛行し、中央の知識階級から地方武士の間へ伝播していった。(正伝直江兼続 渡辺三省著抜粋)

慶次には「似生(じせい)」という雅号(がごう)がありました。慶次自ら連歌会を主催したこともあるようです。

米沢に来てからの慶次は、頻繁に兼続などと、会を開いています。これは当時、連歌会は歌を詠むだけでなく、仲間内で志や理想を語る上でも大切な【集会の場】となっていたのではないかと想像出来るのです。

亀岡文殊堂奉納詩歌、慶長7年(1602)2月27日直江兼続は上杉景勝米沢30万石に移封され城下町づくりに多忙をきわめていた時期に、亀岡文殊堂で詩歌の席を設け、雅友27名が参加、その中に慶次もいました。慶次は後に亀岡百首といわれるこの連歌に短冊五首を残しています。(亀岡文殊蔵)



慶次自筆の和歌(亀岡文殊蔵・画像の無断転用禁止)

■慶次の和歌5首(慶長7年亀岡文殊堂で開催された詩歌の会の短冊)■

◆樵路躑躅(しょうろつつじ) 山柴に 岩根のつつじ かりこめて
花をきこりの 負い帰る道

※山で刈り取った芝に、岩根に咲いていた躑躅が刈り
込められている。それを背負って家に帰る樵は花を
まとっている。

◆夏月(かげつ) 夏の夜の 明やすき月は 明のこり
巻きをまななる こまの戸の内

※夏の夜は短く明けやすい。明けても残っている
月のように、木の間の家でそのまま名残りを惜しんで寝ている。

◆閨上霰(けいじょうあられ) ねやの戸は あとも枕も 風ふれて
あられよこぎり 夜や更けぬらん

※寝所の戸から隙間風が足元や枕元に入ってくるや
ら、霰が吹き抜ける有様であるが、このまま夜は更
けていくだろう。

◆暮鷹狩(くれたかがり) 山陰の くるる片野の 鷹人は
かえさもさらに 袖のしら雪

※山陰の狩り場は日が暮れつつある。寒くなったので
鷹使いの人は、袖に白雪を付けて帰ることだろう。

◆船過江(ふねかこう) 吹く風に 入江の小舟 漕ぎえて
かねの音のみ 夕波の上

※入江の小舟は、風に吹かれて遠く漕ぎ去って
行った。夕暮れの波の上には鐘の音だけが残っ
ている。

4 武辺者(ぶへんもの) 慶次

天正11年(1583)6月、前田利家は金沢に入城しました。この頃、慶次も金沢に
入り前田家に仕えています。時代は戦国、慶次も幾多の戦場に赴いたことでしょう。

“末森城の戦い”

天正12年（1584）北陸の前田と中越の佐々成政の攻防戦。末森城包囲の知らせを受けた利家は、兄利久に金沢城を託し出陣しました。

一の先手、二の先手と陣を組み三番手に慶次を配しました。

慶次にとっては、前田家に戻って最初の戦いでした。援軍の知らせを知って、城方は奮起し、背後から利家の本体が襲いかかり佐々の包囲軍は総崩れとなりました。これが利家一代の武功といわれる『末森の後巻き』ですが、慶次の目立った活躍は記されておりません。

～最上攻め～

会津120万石に移封になった上杉家は、体制づくりのため慶長5年（1600）2月、神指城（こうざしじょう）の新築にあたりました。これらの行動が徳川家康には謀反の準備ではないかと疑われ、詰問状が出されました。それに対して即直江兼続が返書を出します。『国づくりに勤しんでいるところです。告げ口を言う人がいればその人をお調べになってはいかがですか。』などと伝えました。最後に家康の出方次第ではいつでも相手になるという決意を表したものとされています。世にいう【直江状】です。

“畑谷城合戦”

『関原軍記大成』には慶次は搦め手（からめて）※より攻め入り、城から逃れようとする敵を待ち伏せ、首級28をあげたと記されています。

※相手の弱点。相手が注意を払っていないところ。

“長谷堂城の合戦”

畑谷城を攻略した直江兼続は、慶長5年（1600）9月14日長谷堂城を包囲しました。本陣は菅沢山に配し長谷堂城と相対し、25日間も激戦は続き、終始兼続は優位に戦っていましたが、上山城攻略隊が敗れ、応援に來なかつたので長谷堂城の攻略も長引いていました。

9月29日、景勝のもとへ、石田率いる西軍が9月15日家康に敗れたとの報が届きました。即撤退を命じられた兼続は、石田が敗れたのでは自刃するしかないと覚悟したといひます。その時慶次が「およそ一軍の將たる人は、いたずらに死に急ぐことはない」（武辺咄聞書）と言ひ、『後方の敵は、五百川（いもがわ）、水原に協力して押し返す。味方の撤退をすすめてくれ』と戦場に向かい、殿（しんがり）を引き受けました。殿とは撤退の際に敵の追撃を受け持つ部隊のことであり、通常は壊滅に近い被害を受けます。しかし、この兼続の撤退戦は旧日本軍参謀本部の「日本戦史」で取り上げられるほど見事なものであり、そしてこの撤退戦の慶次の働きは目を見張るものがありました。兼続は鉄砲八百挺をもって首尾よく最上勢を迎撃するものの、最上勢はなおも襲いかかる。慶次は水野・藤田・葦塚・宇佐美ら朱柄の槍を持った五名と兵三百をもって、群がり來たる最上勢の中に縦横無尽に分け入って戦っては退き、戦っては退く、という見事な戦いぶりであったといわれています。幾度かの戦闘の末、ついには最上勢の追撃を断念させるに至りました。

慶次の活躍で上杉勢は無事撤退したと伝えられています。最上義光の甲には弾丸の痕があり、戦闘のすさまじさを物語っています。

前田慶次の格好

兼続は米沢へ帰還することができ、慶次は命の恩人となりました。このことから慶次の生涯で一番の活躍の場面となったであろうと想像できます。最上戦での慶次の様子は次の様に記されています。

最上へ出陣のとき慶次郎は山城守宅で、黒具足に猩々緋（しょうじょうひ）の陣羽織に金のひら高の数珠を首にかけ、数珠の房と金の瓢箪を背にたらし、川原毛のふさふさ馬の頭に金の甲をかぶせてこれに乗り、三尺の黒馬を乗換えとしてどんすの袋に味噌、干飯（ほしい）を入れ、鉄砲二丁を乗せていた。『上杉将士書上』

5 関ヶ原後の慶次

慶次についての記述は見当たりませんが、和議交渉の使者として本庄繁長が慶長5年（1600）11月3日京へ出発しました。この頃、慶次も京へ向かったものと思われます。翌年8月16日、上杉家は家康から米沢30万石に移封を命じられました。景勝、兼続は10月15日京を発ち米沢に向かい、そして慶次は景勝、兼続に遅れること9日、10月24日米沢に向かい、京都を旅立ちました。

『上杉将士書上』には、慶次は詩歌にも通じていたので、学者でもあった兼続とは気があったと記されています。慶次については最上戦での活躍もあり、名のある武将であったので、7千石あるいは1万石で召し抱えたいとする招聘（しょうへい）がありました。

しかし、慶次は「天下にわが主は景勝のほかにはない」と断ったといいます。慶次は「石田治部（石田三成）に味方した大名たちは、降参すると人質を渡しおのれの安康を図るあさましい人たちである。（中略）景勝殿は関ヶ原で味方が敗北しても少しも弱みを見せず、ペコペコ頭を下げることもなかった。最後まで合戦を続けた大剛の大將である」というのである。また慶次の上杉家仕官の条件は「禄高は問わない。ただ自由に勤めさせてもらえばよい」と言いました。米沢に着いた慶次は郊外の堂森に客分として余生を過ごしたと伝えられています。

6 遺跡遺品から見える慶次～いかにもかぶき者

米沢城の郊外ほぼ1里の堂森に居を構えた慶次は、生活に係わっているいろんなものを周辺に残しています。慶次に関する資料は加賀藩資料によるところが多いですが、遺跡遺品については米沢の地に比較的多く、荒子城の近く熱田神社に奉納太刀があり、川西町に甲冑があります。

① 無苦庵（むくあん）

慶次が生活した庵（無苦庵）があったといわれている場所。「無苦庵の記」が伝わっています。

② 慶次清水

名前の通り慶次が生活用水として使用していたとされる清水。今もこの名前で主に灌漑用水（かんがいようすい）として使用されており、利水者により毎年川掃除が行われています。以前はふんだんに湧き水がありましたが、開発などにより現在は細くなっています。八幡原 野球場の西側、うっそうと茂った杉林の中にあります。



慶次清水

③ 一花院跡（いっかいんあと）

慶次は慶長17年（1612）6月4日享年70歳前後で波瀾の生涯を閉じました。遺骸は北寺町一花院に葬られたと伝えられていますが、諸説あります。寺は文政7年（1810）の大火で消失。明治初年廃寺となりました。慶次の墓は不明です。

④ 前田慶次供養塔

昭和55年（1980）10月、慶次の戦功と堂森での生活を記した供養塔が堂森善光寺境内に住職酒井清滋氏により建立されました。

⑤ 伝前田慶次所用甲冑

朱漆塗紫糸素懸威五枚胴具足南蛮笠式（しゅうるしぬりむらさきいとすがけおどしごまいどうぐそくなんばんかさしき）で兜は編笠形、袴（かみしも）のように肩の張った肩当（まんちら）と金色の鱗形袖がなんとも異風であり、胴、草摺（くさずり）、肩当が朱漆塗の奇抜な甲冑でいかにも慶次好みです。



伝前田慶次所用甲冑（財団法人 宮坂考古館蔵・画像の無断転載禁止）

⑥ 伝前田慶次所用槍

慶次の武術は並外れており、数多く逸話があります。特に槍使いが得意で、朱柄の槍を使うことを許されたといえます。堂森に庵を構え近隣住民とも馴じみ戦歴に花を咲かせていたある日、孫兵衛が慶次から頂いたものと伝えられています。「下坂」という銘があり、総螺鈿（そうらでん）造りで総長3.13メートルの長槍です。



伝慶次所用の槍（個人蔵・画像の無断転載禁止）



下坂の銘（画像の無断転載禁止）

⑦ 慶次自作のお面

慶次は京都において文人および能楽者などとの交流を積極的に行いその芸を身につけました。能は武士の嗜（たしなみ）のひとつであり公の場所での舞は常でありました。慶次が堂森で彫ったと伝えられているこのお面からは喜怒哀楽の人生を感じ取ることができます。



伝慶次自作のお面（個人蔵・画像の無断転載禁止）

⑧ 堂森秋月の図



堂森秋月図（市立米沢図書館蔵・画像の無断転載禁止）

堂森に居した慶次は堂森山に登り花鳥風月を楽しみました。この図は「米陽八景」の一つで、秋月に照らされた善光寺・堂森山・月見平などが描かれています。慶次没後80年程経って描かれたもので、慶次が晩年を過ごした同森周辺の風景を彷彿させます。



前田慶次道中日記（市立米沢図書館蔵・画像の無断転載禁止）

⑨ 前田慶次道中日記

市立米沢図書館蔵の「米沢善本」（市指定文化財）の中の一冊。慶長6年（1601）、慶次が伏見から米沢へ戻るさいの旅日記で、道中各地の歌枕や古歌、慶次の詠んだ和歌・漢詩が添えられ、文人・慶次の高い教養がうかがえます。

なお、日記の影印本（解説本付）が市立米沢図書館から刊行されており（2,200円）、好評を得ています。

⑩ 前田慶次利貞書状

最近になり、ようやく日の目を浴びた書状で、慶次の自筆として伝えられています。晩年腹痛におかされている様子がわかります。見舞いにいただいたミカンを食べたお礼の手紙です。この書状からも、慶次は晩年米沢に居を構えていたことが分かります。



徳利：木彫りのひょうたん型。高さ25cm（財団法人宮坂考古館蔵・画像の無断転載禁止）



編笠：全て馬の尻尾で編まれている（財団法人宮坂考古館蔵・画像の無断転載禁止）



前田慶次利貞書状（財団法人 本間美術館蔵・画像の無断転載禁止）

この他にも、堂森にはその他生活雑器が数多く残されています。

7 エピソードから見える慶次～強気をくじき弱気を助ける心

慶次はたくさんの逸話を残しています。戦国時代において人間として自由奔放に生きた慶次ではありますが、人の道からはみ出している者たちには厳しかったのです。しかし、ただ厳しいだけではなく、悪戯に見せながら人を諭し、心を改めさせる術には脱帽します。若い人に人気があるのは、その人間性に惹かれるためではないでしょうか。

～其の壺～

『政者といえども滑稽な振る舞いでその心を捉えた』
利家寒中水風呂のご馳走は有名です。景勝への土産には土大根3本を献上する。
また、秀吉の前でかぶいて見せた。

～其の貳～

『和尚といえどもその非道に釘をさした』
林泉寺の和尚が住民に悪さをしているので慶次が乗り込み、囲碁で賭け勝負をして和尚をぶんなぐりこらしめた。

～其の参～

『地元有力者へ奢(おご)る気持ちを戒(いまし)める』
新宅祝いの席で床柱に斧で傷つけ「満つれば欠ける満月」の話をして世の常を諭した。

～其の四～

『人の腐った心をたたき直す』
足を放り出して話し込んでいる店員に、これも商品かと足を買うことにした。刀を抜いて足を百貫文で切り落とす算段。町役人まで巻き込んで商人の心を入れ替えた。

～其の伍～

『使用人の生活習慣を変えるため』
南無阿弥陀仏と四六時中唱えている使用人にうるさいとは言わず、仏様の身にもなってみろと諭した。

～其の六～

『町の無頼漢を懲らしめる』
慶次はハナゲという男と会い鼻毛を買うことにする。約束の時期になっても鼻毛の成長が遅いので、肥やしをやると黄金水(糞尿)をかけて懲らしめた。

～其の七～

『いたずら心で同僚や町人の度肝を抜く』

脇差を指したまま入浴したり、白い紋付羽織に小さなシラミの紋を付けた、兜むくりの珍芸に大勢人を集めるといった悪戯をよくしていた。

これらはほんの一部であり、他にも逸話はたくさん伝えられています。

おわりに

このようにたくさんの逸話を持つ前田慶次は、戦国武将として創造されました。戦国の時代を自由奔放に生き抜いたというその生き様が現代の若者に人気となり、【傾奇者】前田慶次は全国にその名が知れわたりました。

また小説、漫画の世界でデフォルメされた慶次の世界、イラストなど具現化された慶次は当世ヒーローとして戦国武将ブームで大活躍しています。

ゆかりの里堂森には終の棲家（ついのすみか）で悠々自適の生活をした慶次の姿を求めて全国の慶次ファンが訪れており、実在の武将として改めて遺品に触れようと宮坂考古館などに足を運んでいます。しかし肝心の米沢ではまだまだ知る人ぞ知るの存在であることも事実です。この機会に米沢の遺跡や遺物を通して、この人物の魅力をおおいに知るべきなのです。

最後に筆者の好きな、無苦庵の記を紹介したいと思います。

—無苦庵の記—

抑（そもそ）も此（こ）の無苦庵は、孝を勤むべき親もなければ憐れむべき子もなし、心は墨に染めねども、髪結うがむずかしさに、つむりを剃り、てのつかい不奉公もせず、足の駕籠（かご）かき、小者やとわず、7年の病なければ、3年も蓬（もぐさ）用いず、雲無心にして岫（たけ）を出ずるもまたおかし、詩歌に心なければ月花も苦にならず、寝たければ昼もいね、起きたければ夜もおきる。九品蓮台に至らんとする慾心なければ、八万地獄に落ちる罪もなし、生きるまで生きたらば、死ぬるでもあらうかと思う。

【現代語訳】「そもそも、私こと無苦庵には、孝行をつくすべき親もいなければ、憐れみいつくしむべき子供もいない。わが心は墨衣を着るといえるまで僧侶には成りきらないけれども、髪を結うのが面倒なので頭を剃った。手の扱いにも不自由はしていない。足も達者なので駕籠（かご）かきや小者も雇わない。ずっと病気にもならないので、もぐさの世話にもなっていない。そうはいつでも、思い通りにならないこともある。しかし、山間からぽっかり雲が浮かびあらわれるように、予期せぬこともそれなりに趣があるというものだ。詩歌に心を寄せていれば、月が満ち欠け、花が散りゆく姿も残念とは思わない。寝たければ昼も寝て、起きたくなれば夜でも起きる。極楽浄土でよき往生を遂げたいと欲する心もないが、八万地獄に落ちる罪も犯してはいない。寿命が尽きるまで生きたら、あとはただ死ぬというだけのことであろうと思っている。」

堂森の無苦庵での生活は身のまわりのことは自分で行い自由に暮らしながら、花鳥風月を詠む生活を楽しんでいるという前田慶次の人生観を表すものです。



○掲載日 平成23年10月

○執筆者 梅津幸保（前田慶次の会会長）

○編集 勝見弘一（置賜文化フォーラム）

○写真提供 財団法人 宮坂考古館
米沢市上杉博物館
市立米沢図書館
亀岡文殊
財団法人 本間美術館
株式会社 川島印刷
他（個人蔵）

○参照資料 「加賀藩資料」
「米沢里人談」
「米沢地名選」
今福匡「前田慶次」
市立米沢図書館「前田慶次道中日記資料編」
隆慶一郎「一夢庵風流記」
「上杉将士書上」
「前田慶次（歴史群像シリーズ）」
「前田慶次ゆかりの里堂森」

○関連ページ 米澤前田慶次の会 <http://maedakeiji.jp/>

○関連施設 宮坂考古館 米沢市東一丁目2-24 TEL0238-23-8530
・開館/10:00～17:00
（10月以降10:00～16:00）
・休館日/月曜日（祝祭日は翌日）
・入館料/大人300円 学生 200円 小中 100円(団体割引あり)